新聞社の社会部からだという夜の電話で、実はですね、落語家の三遊亭円生さんが、という言葉の出だしの部分で、つまり「落語家の」という声が耳に入った瞬間、あ、円生が死んだな、と思った。むろん、電話の声は一気に流れていたのだから、一秒の何百分の一というような、文字どおり一刹那（せつな）の予感だった。それはそう考えるだけで、ほんとうは名前を聞いたあとで、あッ、と思ったというのが正確なところなのかもしれないが、でも、たしかにそうだったのだ。

私の予感は、すなわち私の怯（おび）えであった。

三遊亭円生高座に死す。

いつかはそういう日がくるのだろうと思っていた。そのほかの形、たとえば長わずらいのあげくというようなことは、円生に限って考えられないという気がしていた。

円生さんはお洒落（しゃれ）の人である。型（かた）の人でもある。

高座でかならず白湯（さゆ）をのんだ。のむといっても、まくらをふりながらほんのひと口するだけの、いわば導入儀式のようなものだったが、ゆっくりと湯呑（の）みのフタをとってから口元に運ぶまでの一連の動作が、いかにもお洒落な感じで、ぴたりときまっていた。はなしの最中にチリ紙をとりだしてはよくタンをきっていたが、それでさえも「型」になっていた。

お洒落な人は、おそらく最後まで型をつらぬくにちがいない。

「芸てぇものは一生です。これでいいという終点はないんですから。芸人は高座で死ねたらいちばんしあわせです」

円生自身の口から、何度そんな述懐を聞いたか分からない。人形町末広の高座で三味線の調子をなおそうとして倒れ、三味線、三味線とつぶやいて死んだ浮世節の西川たつの話がそのたびに出た。自分もああいう死に方をしたい、という意味のことを口にする円生さんのひどく真剣な顔を見て、この人はいつかきっとそうなる、という確信に近いものを感じたことをおぼえている。

いつかは、というそのはく然とした不安が、私の中で徐々に重たいものに変わり始めたのは、ここ一、二年ぐらいのあいだだったと思う。とくに、一門をつれて落語協会をとびだした去年の分裂騒動後の、円生さんの表情と物言いに接するたびに、不安がつのった。

「あたしも、もうじき八十、いつ死んでも不思議はないんだから、このへんで好きなことをやらせてもらいます」

芸人は芸だけ、自分の目が黒いうちは、絶対にこの道を歩いてみせる、ときっぱりいいきる円生さんの不退転の決意の線上に、この日がちらりと見えかくれしたような気がしたからである。

その日がきてしまった。

一席終えた直後に楽屋で倒れたのだそうだから、円生さんはさだめし本望だったろう、と考えながら、まだ信じられない。（随筆家）

十八番のひとつ「死神」をきかせる円生師匠＝4月26日、東京・霞が関のイイノホール「日刊とびきり各席」で

本望だったろう

楽屋で倒れ「型」貫く

滋　江國

円生師匠　その死

"分裂"収拾で供養を

落語界発展念じ続けた名人

文楽、志ん生亡きあと、名人の名をほしいままにした故三遊亭円生師の生涯は、また、"芸の虫"と呼ぶにふさわしい寄席芸人のそれであった。自らに課した修業への執念は、ついに尽きることを知らなかった。そんな円生師をかい間見るエピソードに事欠かぬなかで、最後に見せた激しい気迫のほとばしりは、昨年六月の協会分裂劇だったろうか。

落語協会側の真打ち"乱造"を批判し、一門で落語三遊協会を結成した折、記者会見の席上で、円生師はきびしい口調でこういいきった。「私はプロだ。素人とやるのはいやだ」と。さらにこうもいい継いだ。「生きてる間は勉強です。ウソではございません、やってます。一日でもうまくなって死にたい」

その名人芸を形として伝えることの出来ない飽芸の宿命として、いまはその芸風と気骨を惜しむしかない。例外的に、艶（つや）っぽさを特徴とした落語独特の口調を、一番弟子の三遊亭円楽が、あるいはより色濃く孫弟子の三遊亭楽松（今月九日に圓楽を襲名する）が継承していくことだろう。

が、円生師の芸それ自体は、明治・大正・昭和期を生きた"最後の寄席芸人"の名とともに永遠の眠りについたといえる。

真打ち問題でみせた執念は、不幸にして協会の分裂を招いたが、つい最近になって双方が相手方の真打ち昇進を認め合う機運が生まれるなど、対立関係に曾どけムードが漂いはじめた矢先の死でもあった。芸の伴わない真打ち昇進の非を鳴らす円生師。いや、真打ちはスタートラインにすぎないとする落語協会。その見解は両極端に違いはなかった。

分裂騒ぎは決してむだではなかった。当事者たちが予期せぬほどの社会的反響を呼んだ様は、"どっこい落語は庶民の間に生きている"の証明でもあったのだ。

円生師の死を悼むいま、残された者がなしうる供養の一つは、分裂状態のすみやかな収拾ではないだろうか。双方のメンツにこだわらぬ収拾への努力は、芸の追求と落語界の発展を念じてやまなかった円生師の生前の業績をたたえることにはなっても、はずかしめることにはならない。（富）